

芝は二階に居た。

黒子の女が今家に居るか探してくれと頼んだ。

僕は此處でも濡れ手拭で頭を冷さなければならなかつた。

二十分ばかりすると芝が歸つて来て、『ホクロは十日程前、大阪へ行つて居ないそうだ。

ナカ屋と森へ、野田と一緒にやつて聞いてみたんだ』と言ふ。

失望して落膽して、僕は淺猿しい聲を出して、春雨を唄つたりした。

家へ歸つてみた。

父は頬のコケた、ゲツソリした顔をして、座敷に風邪を病んでねてゐる。

僕は挨拶もしないで、弟の靈と書いて祭つてある白布に蔽はれたものをチラと見て、其の儘離れの四疊半と三疊の居間へ行つてみた。

姉が氣を利かして、コップや啖吐きや火鉢などを置いて、布團を敷いてくれてゐたので其の儘ねる事にした。

翌朝酔吐蠟を食べた事を覚えてゐる。